

伝統をなすものとは全く異なったものであることを、この書は明示している。「神秘主義」は本来決して非合理主義ではないのである。

この書は、中世末期の精神的に最も重要な現象の一つを、原典に即して研究し、そこから慎重に、神秘主義の確かな特質を引き出している。神秘主義において、反省的思考、概念や言語を通じての熟考は、実存的なあり方、つまりいわゆる神秘的経験の不可欠な条件であり、それと密接に結びついている。概念的思考は、その限界に至るまで遂行された時、それ自身を超越し、もはや思考の働かない神秘的合一という究極の目標に到達する。絶対的な「唯一なる一」に向かって進む人間精神の運動をドイツ神秘主義の諸相において明らかにするこの書は、今日のわれわれに一つの確実な道標を与えているように思われる。

John F. Wippel: *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*.

The Catholic University of America Press, 1984 pp. xii + 293.

稲垣良典

本書はウィップル神父がこれまでに発表した論文のうち、トマス・の形而上学思想に関するものを集め(13世紀後期の形而上学思想に関する諸論文は別に刊行の予定)、それに書き下しの章(第5、6章)を加えた10章から構成されている。著者は現在、アメリカ・カトリック大学の哲学部正教授であり、北アメリカにおける最も著名な中世哲学研究者の一人である。なお著者が同じ大学出版部から1981年に出版した *The Metaphysical Thought of Godfrey of Fontaines: A Study in Late Thirteenth Century* (ベルギー、ルーヴェン大学 *Maitre Agrégé* を取得した労作) は13世紀後期スコラ哲学に関する最近の重要な研究の一つである。

第1章「トマス・アキナスとキリスト教的哲学の問題」において、著者は20世紀におけるトマス・ないしスコラ哲学研究の特色の一つは、スコラ哲学者たちが神学

者であったことの確認である、と指摘した上で、キリスト教的哲学、およびキリスト教的哲学者としてのトマスをめぐるジルソンの独創的見解を紹介し、批判的考察を行っている。著者によると、信仰は哲学を誤謬から救う否定的規範たるにとどまらず、積極的影響をも及ぼすのであり、そこに「キリスト教的」哲学が成立する根拠がある、という見解から出発したジルソンは、最終段階では、キリスト教的哲学は神学と哲学との区別を超越する、と主張するに到る。著者のジルソン批判はこの後期の立場に向けられており、トマスにおいては、かれ独自の神学の創造に先立って哲学的思索の展開があったのだ、という指摘を行うと共に、神学的枠組のなかでの哲学としてのキリスト教的哲学、というジルソンの見解を鋭く反駁している。

第2章「アクィナスとアヴィセンナ——第一哲学と他の諸思弁学との間の関係」においては、トマス形而上学の主要源泉としてのアヴィセンナが考察される。著者はトマスの初期著作『ボエティウス三位一体論註解』から、アヴィセンナへの引照をふくむテキストを選びだし、その読み方について自らの見解を示し、アヴィセンナの他のテキストとの比較を通じてその妥当性を立証しようと試みる。

第3章「トマス・アクィナスの《第一哲学》観」は、最高の思弁学たる形而上学が《第一哲学》と呼ばれてきた理由について、トマスが二つの異なった説明(1)他の諸学への基本命題の提供(2)諸々の第一原因の探求)を与えていることに着目し、この相違をその方法論的背景をつきとめることを通じて解明しようとする試みである。著者はトマスの方法論のうちに見出されるいくつかの基本的な区別を指摘した上で、(1)の説明は内的原因に即した(*secundum rationem*)総合の道(*via inventionis*)、後者は外的原因に即した(*secundum rem*)分析の道(*via resolutionis*)との関連で語られている、と見ることによって、この相違を斉合的に説明できる、と結論する。

第4章「トマス・アクィナスにおける形而上学と《分離》」においては、資料からの切離しによって形而上学の対象である *ens commune* の認識を可能ならしめる判断としての「分離」について、まずこの用語が後期の著作から姿を消しているのは立場の変化を意味するものではないことが論じられる。ついで著者は、この分離判断は自然学の結論としての非質料的なるもの(神、分離実体、靈魂)の存在を前提とすると主張する L. B. Geiger の立場を紹介し、それを裏付けるトマスのテク

ストが存在することを認めつつも、より斉合的な解釈は、まずこの分離判断によって *ens commune* を対象とする形而上学が成立し、ついで推論によってその原因である神の存在が確立される、とするものであると論じている。

同様の議論が次の第5章「デ・エンテ第4章における本質と存在」においても展開されている。すなわち、問題の箇所において、本質と存在との実在的区別は、まず神の存在が確立された上で、すべての被造物に関して主張されているとする J. Owens の解釈に反対して、著者は本質と存在とはただ一つのものにおいて同一であり、他のすべてにおいては実在的に区別されるという議論の妥当性は、神の存在論証を前提とするものではなく、むしろこの区別が当の論証にとっての出发点であると主張する。この主張は第1章におけるジルソン批判に対応するものであり、著者のトマス解釈の基本的立場を示している。

第6章においてはデ・エンテ以外の著作の随所に見出される、すべての被造物における本質と存在の実在的区別をめぐる議論が(1)「類」にもとづく議論 (2)神から被造物へと進められる議論 (3)分有にもとづく議論 (4)個的存在の有限性にもとづく議論、に整理され、それぞれの議論としての有効性、およびそれらが神の存在についての知識を前提とすることなしに成立するか否かが検討される。著者は、これらの議論のうち、かなりのものが神の存在を前提とする形で進められていることを確認しつつ、実際にはそのような前提なしにも議論として妥当性を有すると主張しており、第4、5章におけると同様なトマス解釈の立場が示されている。

第7章「トマス・アクィナス、ガンのヘンリクス、フォンテーヌのゴドフロワー—未だ存在しない可能的なものの実在性をめぐって」は、トマス、およびトマスの第二回パリ大学教授任期中にパリ大学に在学し、その後あいついで神学部教授として活躍した二人の哲学・神学者が、それぞれ未だ存在しない可能的なものの存在論的身分に関してとった立場の比較研究である。この三者の関係は、トマスがこのような可能的なもの、それ自体における実在性を認めないのにたいして、ヘンリクスはより積極的にその実在性を主張し、ゴドフロワは再びトマスに近い立場をとる、という風に要約されるが、後の二者は被造物における本質と存在の実在的区別を認めない点で一致している。こうした立場の相違は、かれらが相互に著しく異なった形而上学的世界のうちで思索していたことを示す、というのが著者の見解であ

る。

第8章「永遠なる創造の可能性に関するトマス・アクィナスの立場」において論じられているのは、トマスが世界の永遠性と非永遠性（時間における始まり）のいずれも論証不可能であると主張したことは確かであるとした上で、かれは果して世界の永遠なる創造が可能であるとの立場をとったか否か、という問題である。世界の永遠性の問題は初期の『命題論集註解』から中期の『対異教徒大全』を経て後期の『神の能力について』『神学大全』その他において論じられているが、そのいずれにおいても世界の永遠性と非永遠性の両者が論証不可能であることが主張されるにとどまっている。しかるに、ただ一つ、後期の論争的著作『世界の永遠性について』において、トマスは何ものかが神によって創造されることと、それが常に存在していたこととは内的に矛盾するか、と問い、否と答える。すなわち、トマスはここで積極的に、永遠的に創造される世界が可能であるとの立場をうちだしているのである。著者はその理由について、それまではわれわれは世界が始まりを有することを啓示信仰によって確信しうる、と主張することで満足してきたトマスが、この著作でより積極的な主張をあえてしたのは論争の熱気に影響されたものであろうが、その主張そのものは以前の議論にも内含されていたものである、と述べている。

第9章「神の何性についての認識」において、著者は、われわれは神についてその「何である」かを知りえず、ただ「何であらぬ」かを知りうる、というトマスの一貫した主張と、かれがモーゼス・マイモニデスの「不可知論」を厳しく批判していることとの間の矛盾（と見える現象）に注目し、トマスの真意を探ろうと試みる。著者によると、トマスが斥けているのは「完全な把握」を意味するような、神の何性についての認識であり、神の本質ないし実体について何らかの不完全な認識に到達する可能性が否定されているのではない。実際に、トマスは神にたいして或る名称が「実体的ないし本質的に」帰属せしめられる可能性を、次第により明確に主張しているのであって、それはまさしくマイモニデス流の「不可知論」との対決を通じてであった、というのが著者の解釈である。

最後の第10章「神の知、神の能力と人間の自由——トマス・アクィナスとガンのヘンリクス」の主題は、中世を通じて論議され、近世に入ってから激しい論争の対象となった、将来の偶然的なことについての神の知と人間の自由はいかにして両

立することが可能か、という問題である。著者によると、この問題に関するトマスの立場の核心は、神はすべての被造的能動因を、後者が自らの本性にかなった仕方
で働きを為すように動かす——自由な能動因の場合は、それが「自由に」働きを
為すように動かす——という洞察のうちに見出される。これにたいして、ヘンリク
スはトマスの見解を——ギヨム・ド・ラ・マールの「訂正」をも考慮しつつ——大
幅に取り入れようとしながらも、トマスの基本的洞察の意味するところを把握しえ
なかった、というのが著者の評価である。

以上、トマスの形而上学をめぐる最近の研究状況の紹介ともなることを期待し
て、本書の内容をほとんど論評をまじえることなく概観した。著者の意図はトマス
の学説をできるかぎり13世紀の知的枠組、問題状況との関連において解釈するこ
とにある。いま一つ著者が力をいれているのは、トマスの思想をその発展段階を注意
深くたどることによって適確に理解することである。いずれも哲学史的研究にたず
さわる者として当然のことであるが、著者の着実にして公正な論述は高く評価され
るべきであると思う。